

中島
敦

盈
虛



盈^え_い

虚^き_よ

衛^{えい}の靈公^{れいこう}の三十九年という年の秋に、太子蒯聵^{かいがい}が父の命を受けて齊^{せい}に使したことがある。途^{みち}に宋^{そう}の国を過ぎた時、畑に耕す農夫共が妙^{みょう}な唄^{うた}を歌うのを聞いた。

既定爾婁豬

盍歸吾艾豨

牝豚^{めすぶた}はたしかに遣^やった故

早く牡豚^{おす}を返すべし

衛の太子はこれを聞くと顔色を変えた。思い当ること

があつたのである。

父・靈公の夫人（といつても太子の母ではない）南子なんしは宋の国から来ている。容色よりもむしろその才気でもってすっかり靈公をまるめ込こんでいるのだが、この夫人が最近靈公に勧め、宋から公子朝ちようという者を呼んで衛の大夫たいふに任じさせた。宋朝は有名な美男である。衛に嫁ぐ以前の南子と醜しゆう関係かんけいがあつたことは、靈公以外の誰一人として知らぬ者は無い。二人の関係は今衛の公宮で再びほとんどおおつぴらに続けられている。宋の野人の歌うた牝豚牡豚とは、疑いもなく、南子と宋朝とを指し

ているのである。

太子は齊から帰ると、側臣の戯陽速ぎやうそくを呼んで事を謀はかつた。翌日、太子が南子夫人に挨拶あいさつに出た時、戯陽速は既にすでにあいくちヒ首を呑んで室の一隅の幕の陰に隠れていた。さりげなく話をしながら太子は幕の陰に目くばせをする。急に臆おくしたもののか、刺客しかくは出て来ない。三度合図をしても、ただ黒い幕がごそごそ揺れるばかりである。太子の妙なそぶりに夫人は気が付いた。太子の視線を辿たどり、室の一隅に怪しい者の潜ひそんでいるを知ると、夫人は悲鳴を挙げて奥へ跳び込んだ。其の声に驚いて霊公が出て来る。夫

人の手を執とつて落着けようとするが、夫人はただ狂氣の
ように「太子がわたしを殺します。太子がわたしを殺し
ます」と繰返すばかりである。靈公は兵を召めして太子を
討たせようとする。その時分には太子も刺客もとうに都
を遠く逃げ出していた。

宋に奔はしり、続いて晋しんに逃のがれた太子蒯聵は、人毎に語つ
て言った。淫婦いんぷ刺殺というせつかくの義拳も臆病な莫迦ぼか
者ものの裏切によつて失敗したと。これもやはり衛から出奔
した戲陽速がこの言葉を伝え聞いて、こう酬むくいた。とん
でもない。こちらの方こそ、すんでの事に太子に裏切ら

れるところだったのだ。太子は私を脅おどして、自分の義母を殺させようとした。承知しなければきつと私が殺されたに違いないし、もし夫人を巧うまく殺せたら、今度は必ずその罪をなすりつけられるに決っている。私が太子の言を承諾して、しかも実行しなかったのは、深謀遠慮の結果なのだ。

晋では当時范氏はん中行氏ちゆうこうの乱で手を焼いていた。齊・衛の諸国が叛乱者の尻押をするので、容易に埒らちがあかないのである。

晋に入った衛の太子は、此の国の大黒柱たる趙簡子ちようかんしの許に身を寄せた。趙氏がすこぶる厚遇こうぐうしたのは、この太子を擁立することによつて、反晋派たる現在の衛侯えいこうに楯突たてつこうとしたに外ならぬ。

厚遇とはいつても、故国にいた頃の身分とは違ふ。平野の打続く衛の風景とはおよそ事變ことかわつた・山勝ちの絳こうの都に、侘わびしい三年の月日を送つた後、太子は遙かに父衛侯の訃ふを聞いた。噂によれば、太子のいない衛国では、やむを得ず蒯瞶ちようの子・輒ちようを立てて、位に即つかせたといふ。国を出奔する時後に残して来た男の児こである。当然

自分の異母弟の一人が選ばれるものと考えていた蒯瞶は、ちよつと妙な気がした。あの子供が衛侯だと？ 三年前のあどけなさを考えると、急に可笑しくなつて来た。すぐにも故国に歸つて自分が衛侯となるのに、何の造作も無いように思われる。

亡命太子は趙簡子の軍に擁せられて意気揚々と黄河を渡つた。いよいよ衛の地である。戚の地まで来ると、しかし、そこからはや一步も東へ進めないことが判つた。太子の入国を拒む新衛侯の軍勢の邀撃に遇つたからである。戚の城に入るのでさえ、喪服をまとい父の死を哭

しつつ、土地の民衆の機嫌きげんをとりながらはいらなければならぬ始末であつた。事の意外に腹を立てたが仕方が無い。故国に片足突つ込んだまま、彼はそこに留とどまつて機を待たねばならなかつた。それも、最初の予期に反し、およそ十三年の長きに亘わたつて。

もはや（かつては愛らしかつた）己おのれの息子の輒ちようは存しつよう在しない。己の当然嗣つぐべき位を奪つた・そして執拗しつように己の入国を拒否する・貪慾な憎むべき・若い衛侯が在るだけである。かつては自分の目をかけてやつた諸大夫連が、誰一人機嫌伺うかがいにさえ来ようとしなない。みんな、

あの若い傲慢な衛侯と、それを輔ける・しかつめらしい
ろうかい 老獪な上卿・孔叔圉（自分の姉の夫に当る爺さんだが）
しょうけい の下で、蒯瞶などという名前は昔からでんで聞いたこ
こうしゆくぎよ ともなかつたような顔をして楽しげに働いている。

明け暮れ黄河の水ばかり見て過した十年余りの中に、
あ 気まぐれで我が儘だった白面の貴公子が、いつか、刻薄
まま で、ひねくれた中年の苦勞人に成上っていた。

荒涼たる生活の中で、ただ一つの慰めは、息子の公子疾
こうししつ であつた。現在の衛侯輒とは異腹の弟だが、蒯瞶が戚
ちよう の地に入るとすぐに、母親と共に父の許に赴き、そこで

一緒に暮らすようになったのである。志を得たならば必ずこの子を太子にと、蒯瞶は固く決めていた。息子の外にもう一つ、彼は一種の棄鉢すてばちな情熱の吐け口はを鬪雞戯とうけいぎに見出みいだしていた。射倖心しゃこうしんや嗜虐性しぎやくせいの満足を求め、以外以外に、逞たくましい雄雞ゆうけいの姿への美的な耽溺たんできでもある。余り裕ゆたかでない生活くらしの中から莫大な費用を割さいて、堂々たる雞舎を連ね、美しく強い雞共を養っていた。

孔叔圉こうしゆくぎよが死に、その未亡人で蒯瞶の姉に当る伯姫はくきが、息子の悝かいを虚器きよきに擁して権勢を揮ふるい始めてから、ようや

く衛の都の空気は亡命太子にとって好転して来た。伯姫
 の情夫・渾良夫こんりょうふという者が使となつてしばしば都と戚
 との間を往復した。太子は、志を得たあかつき 暁には汝なんじを大
 夫に取立て死罪に抵あたる咎とがあるも三度までは許そうと良夫
 に約束し、こを手先としてぬかり無く策謀さくぼうを運めぐらす。
 周の敬王の四十年、閏うるう十二月某日蒯聩は良夫に迎え
 られて長駟都ちようくに入った。薄暮はくぼ女装して孔氏の邸やしきに潜入、
 姉の伯姫や渾良夫と共に、孔家の当主衛の上卿たる・甥
 の孔悝こうかい（伯姫からいえば息子）を脅し、これを一味に入
 れてクウ・デ・タアを断行した。子・衛侯は即刻そつこく出奔、

父・太子が代って立つ。すなわち衛の莊公そうこうである。南子に逐おわれて国を出てから実に十七年目であった。

莊公が位に立って先ず行おうとしたのは、外交の調整でも内治の振興でもない。それは実に、空費された己の過去に対する補償であった。あるいは過去への復讐であった。不遇時代に得られなかった快樂は、今や性急にかつ十二分に充たみされねばならぬ。不遇時代に惨みじめに屈くっしていた自尊心は、今やにわかごうぜんに傲然ごうぜんと膨ふくれ返らねばならぬ。不遇時代に己を虐しいたげた者には極刑を、己を蔑さげすんだ

者には相当な懲しめを、己に同情を示さなかつた者には冷遇を与えねばならぬ。己の亡命の因であつた先君の夫人南子が前年亡くなつていたことは、彼にとつて最大の痛恨事であつた。あの姦婦を捕えてあらゆる辱しめを加えそのあげく極刑に処してやろうというのが、亡命時代の最も愉しい夢だつたからである。過去の己に対して無関心だつた諸重臣に向つて彼は言つた。余は久しく流離の苦を嘗め来たつた。どうだ。諸子にもたまにはそういう経験が薬だらうと。この一言で直ちに国外に奔つた大夫も二三に止まらな^{いとど}い。姉の伯姫と甥の孔悝と

には、もとより大いに酬いる所があつたが、一夜宴えんに招いて大いに酔わしめた後、二人を馬車に乗せ、御者ぎよしやに命じてそのまま国外に駆かり去らしめた。衛侯となつてからの最初の一年は、誠に憑つかれたような復讐の月日であつた。空むなしく流離の中に失われた青春の埋合うめあわせのため、都下の美女を漁あさつては後宮に納いれたことは附加つけくわえるまでもない。

前から考えていた通り、己と亡命の苦を共にした公子疾を彼は直ちに太子と立てた。まだほんの少年と思つていたのが、いつしか堂々たる青年の風ふうを備え、それに、

幼時から不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて来たせいか、年に似合わぬ無気味な刻薄さをチラリと見せることがある。幼時の溺愛できあいの結果が、子の不遜ふそんと父の讓歩という形で、今に到るまで残り、はたの者には到底不可解な気の弱さを、父はこの子の前にだけ示すのである。この太子疾と、大夫に昇のぼった渾良夫こんりょうふとだけが、莊公にとっての腹心といつてよかつた。

ある夜、莊公は渾良夫に向つて、先の衛侯輒ちようが出奔に際し累代るいだいの国の宝器をすつかり持去つたことを語り、

いかにして取戻すとりもどべきかを計った。良夫は燭しよくを執とる侍者じしやを退席させ、自ら燭を持って公に近付き、低声に言った。亡命された前衛侯も現太子も同じく君の子であり、父たる君に先立って位に在られたのも皆みな自分の本心から出たことではない。いつそこの際前衛侯を呼戻し、現太子とその才を比べてみて優れた方を改めて太子に定められてはいかん。もし不才だったなら、その時は宝器だけを取上げられればよい訳だ。……

その部屋のどこかに密偵が潜ひそんでいたものらしい。慎重に人払いをした上でのこの密談がそのまま太子の耳に

入った。

次の朝、色を作した太子疾が白刃を提げた五人の壮士を従えて父の居間へ闖入する。太子の無礼を叱咤するどころではなく、莊公はただ色蒼ざめて戦くばかりである。太子は従者に運ばせた牡豚を殺して父に盟わしめ、太子としての己の位置を保証させ、さて渾良夫の如き奸臣はたちどころに誅すべしと迫る。あの男には三度まで死罪を免ずる約束がしてあるのだと公が言う。それでは、と太子は父を威すように念を押す。四度目の罪がある場合には間違ひなく誅戮なさるでしような。すつか

り気を吞まれた莊公は唯々いとして「諾」だくと答えるほかは無いい。

翌年の春、莊公は郊外の遊覽地籍圃せきほに一亭いっていを設け、墻塼しょうへい、器具、緞帳どんちようの類をすべて虎の模様一式で飾った。落成式の当日、公は華やかな宴を開き、衛国の名流は綺羅きらを飾ってことごとくこの地に会した。渾良夫はもともと小姓こしょう上りとして派手好みの伊達男だておとこである。この日彼は紫し衣えに狐裘こぎゆうを重ね、牡馬二頭立の豪華な車を駆かって宴に赴いた。自由な無礼講のこととて、別に劍はを外はずしもせず

に食卓に就き、食事半ばにして暑くなつたので、裘を脱ぬいだ。この態ていを見た太子は、いきなり良夫に躍おどりかかり、胸倉むなぐらを搦つかんで引摺ひきずり出すと、白刃をその鼻先に突きつけて詰なつた。君寵くんようを恃たのんで無礼を働くにも程があるぞ。君に代つてこの場で汝なんじを誅するのだ。

腕力に自信の無い良夫は強しいて抵抗もせず、莊公に向つて哀願の視線を送りながら、叫ぶ。かつてご主君は死罪三件までこれを免ぜんと我に約し給うた。されば、たとい今我に罪ありとするも、太子は刃やいばを加えることが出来ぬはずだ。

三件とや？　しからば汝の罪を数えよう。汝今日、国君の服たる紫衣をまとう。罪一つ。天子直参じきさんの上卿用たる衷ちゆうじ甸じゆうり両りょう牡ぼうの車に乗る。罪二つ。君の前にして裘を脱ぎ、劍を釈とかずして食う。罪三つ。

それだけでちようど三件。太子はいまだ我を殺すことは出来ぬ、と、必死にもがきながら良夫が叫ぶ。

いや、まだある。忘れるなよ。先夜、汝は主君に何を言上したか？　君侯父子を離間りかんしようとする佞臣ねいしん奴め！

良夫の顔色がさつと紙のように白くなる。

これで汝の罪は四つだ。という言葉も終らぬ中に、良

夫の頸はがっくり前に落ち、黒地に金で猛虎を刺繍した大緞帳に鮮血がさつと迸る。

莊公は真蒼な顔をしたまま、黙って息子のすることを
見ている。

晋の趙簡子の所から莊公に使が来た。衛侯亡命の砌、
及ばずながらお援け申したところ、帰国後一向にご挨拶
が無い。ご自身に差支えがあるなら、せめて太子なりと遣
わされて、晋侯に一応のご挨拶がありたい、という口上
である。かなり威猛高なこの文言に、莊公はまたして

も己の過去の惨めさを思出し、少からず自尊心を害した。国内に^{ごたごた}いまだ紛争が絶えぬ故、今しばらく^{ゆうよ}猶予されたい、と、^{とりあ}取敢えず使をもつて言わせたが、その使者と入れ違いに衛の太子からの密使が晋に届いた。父衛侯の返辞は単なる遁辞^{とんじ}で、実は、以前^{やっかい}厄介になった晋国が煙^{けむ}たさ故の・故意の延引なのだから、欺^{だま}されぬように、との使である。一日も早く父に代りたいいいがための策謀と明らか^あに知れ、趙簡子もさすがにいささか不快だったが、一方衛侯の忘恩もまた必ず懲^{こら}さねばならぬと考えた。

その年の秋のある夜、莊公は妙な夢を見た。

荒涼たる曠野こうやに、檐のきも傾かたむいた古い楼台ろうだいが一つ聳そびえ、

そこへ一人の男が上つて、髪を振り乱して叫んでゐる。

「見えるわ。見えるわ。瓜うり、一面の瓜だ。」見覚えのあ

るような所と思つたらそこは古いにしえの昆吾氏こんごしの墟あとで、なる

ほど到る処累々たる瓜ばかりである。小さき瓜をこの大

きさに育て上げたのは誰だ？ 惨めな亡命者を時めく衛

侯にまで守り育てたのは誰だ？ と楼上で狂人のごとく

地団駄を踏ふんで喚わめいているかの男の声にも、どうやら聞

き憶えがある。おやと思つて聞き耳を立てると、今度は

莫迦にはつきり聞えて来た。「俺は渾良夫だ。俺に何の罪があるか！俺に何の罪があるか！」

莊公は、びっしより汗をかいて眼を覚した。いやな氣持であつた。不快さを追払おうと露台へ出てみる。遅い月が野の果に出た所であつた。赤銅色に近い・紅く濁つた月である。公は不吉なものを見たように眉を顰め、再び室に入つて、氣になるままに灯の下で自ら筮竹を取つた。

翌朝、筮師を召してその卦を判ぜしめた。害無しと言ふ。公は欣び、賞として領邑を与えることにしたが、

筮師は公の前を退くと直ぐに倉皇そうこうとして国外に逃れた。
 現れた通りの卦をそのまま伝えれば不興こうむを蒙こうむること必ひつ
じょう定故、ひとまず偽いつわって公の前をつくり、さて、後に
 一散に逃亡したのである。公は改めて卜ぼくした。その卦兆
 の辞を見るに「魚の疲れ病み、赤尾を曳ひきて流に横たわ
 り、水辺を迷うがごとし。大国これを滅ぼし、まさに亡
 びんとす。城門と水門とを閉じ、すなわち後より踰こえん」
 とある。大国とあるのが、晋であろうことだけは判るが、
 その他の意味は判然しない。とにかく、衛侯ぜんとの前途の暗
 いものであることだけは確かと思われた。

残年の短かさを覚悟させられた莊公は、晋国の圧迫と太子の専横せんおうとに対して確乎かつこたる処置を講ずる代りに、暗い予言の実現する前に少しでも多くの快樂を貪むさぼろうとひたすらにあせるばかりである。大規模の工事が相繼あいついで起され過激な労働が強制されて、工匠こうしやう石匠等らの怨嗟えんさの聲が巷ちまたに満ちた。一時忘れられていた鬪雞戲への耽溺も再び始まった。雌伏しふく時代とは違って、今度こそ思いきり派手にこの娯たのしみに耽ふけることが出来る。金と権勢とに饜あかして国内国外から雄雞の優れたものがことごとく集められた。殊ことに、魯ろの一貴人から購もとめ得た一羽のごと

き、羽毛は金のごとく距けづめは鉄のごとく、高冠こうかん昂尾こうび、誠に稀まれに見る逸物である。後宮に立入らぬ日はあつても、衛侯がこの雞の毛を立て翼を奮さまう状を見ない日は無かつた。

一日、城楼から下の街々を眺めていると、一ヶ所甚はなはだ雑然とした陋穢ろうわいな一劃いっかくが目に付いた。侍臣に問えば戎じゆう人の部落だという。戎人とは西方の化外けがいの民たみの血を引いた異種族である。眼障めざわりだから取払えと莊公は命じ、都門の外十里の地に放逐ほうちくさせることにした。幼を負おい老を

曳き、家財道具を車に積んだ賤民共が陸続と都門の外へ出て行く。役人に追立てられて慌て惑う状が、城楼の上からも一々見て取れる。追立てられる群集の中に一人、際立って髪美しく豊かな女がいるのを、莊公は見付けた。すぐに人を遣ってその女を呼ばせる。戎人己氏なる者の妻であつた。顔立は美しくなかつたが、髪の見事さは誠に輝くばかりである。公は侍臣に命じて此の女の髪を根本から切取らせた。後宮の寵姫の一人のためにそれで以て髻を拵えようというのだ。丸坊主にされて帰って来た妻を見ると、夫の己氏はすぐに被衣を妻にか

ずかせ、まだ城楼の上に立っている衛侯の姿を睨にらんだ。役人に咎むち打たれても、容易にその場を立去ろうとしないのである。

冬、西方からの晋軍の侵入と呼応して、大夫・石圃せきほなる者が兵を挙げ、衛の公宮を襲おそうた。衛侯の己を除こうとしているのを知り先手を打ったのである。一説にはまた、太子疾との共謀によるのだともいう。

莊公は城門をことごとく閉じ、自ら城楼に登って叛軍はんぐんに呼び掛かけ、和議の条件を種々提示したが石圃は頑がんとし

て応じない。やむなく寡すくない手兵を以て禦ふせがせている中うちに夜に入った。

月の出ぬ間の暗さに乗じて逃れねばならぬ。諸公子・侍臣等の少数を従え、例の高冠昂尾の愛雞を自ら抱いて公は後門を踰こえる。慣れぬこととて足を踏み外して墜おち、したたか股ももを打ち脚を挫くじいた。手当をしている暇ひまは無い。侍臣に扶たすけられつつ、真暗な曠野を急ぐ。とにもかくにも夜明までに国境を越えて宋の地に入ろうとしたのである。大分歩いた頃、突然空がぼうつと灰黄色ほのきいろく野の黒さから離れて浮上ったような感じがした。月が出たのである。

る。いつかの夜夢に起されて公宮の露台から見たのとまるでそっくりの赤銅色に濁った月である。いやだなと荘公が思った途端、左右の叢くさむらから黒い人影がばらばらと立現れて、打って掛かった。剽盗ひょうとうか、それとも追手おってか。考える暇もなく激しく闘わねばならなかった。諸公子も侍臣等も大方おおかたは討たれ、それでも公はただ独り草に匍はいっつ逃れた。立てなかったためにかえって見逃されたのでもあろう。

気が付いてみると、公はまだ雞をしっかり抱いている。先ほどから鳴声一つ立てないのは、とうに死んでしまっ

ていたからである。それでも捨て去る気になれず、死んだ雞を片手に、匍って行く。

原の一隅に、不思議と、人家らしいもののかたまつた一郭いっかくが見えた。公はようやくそこまで辿り着き、氣息奄々きそくえんえんたる様でさまとつつぎの一軒に匍い込む。扶たすけ入れられ、差出された水を一杯飲み終った時、とうとう来たな！と、いう太い声がした。驚いて眼を上げると、この家の主人らしい・赭あから顔の・前歯の大きく飛出た男がじつと此方を見詰みめている。一向に見憶えが無い。

「見憶えが無い？　そうだろう。だが、此こ奴やつなら憶えて

いるだろうな。」

男は、部屋の隅に蹲うすくまっていた一人の女を招いた。

その女の顔を薄暗うすぐらい灯の下で見た時、公は思わず雞の死骸がいを取り落とし、ほとんど倒れようとした。被衣をもつて頭を隠したその女こそは、紛まぎれもなく、公の寵姫の髻かもしのために髪を奪うばわれた己き氏の妻であった。

「許せ」と嗻しゃがれた声で公は言った。「許せ。」

公は顫ふるえる手で身に佩おびた美玉をとり外して、己氏の前に差出した。

「これをやるから、どうか、見逃してくれ。」

己氏は蕃刀ばんとうの鞘さやを払って近附きながら、ニヤリと笑った。

「お前を殺せば、璧たまがどこかへ消えるともいえるのかね？」

これが衛侯蒯聩さいごの最期であった。

(昭和十七年十一月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館